

「1970年代以降のパフォーマンスおよび展覧会のビデオ記録のデジタル化・レコード化」(慶應義塾大学アート・センター、以下KUAC)

事業概要

本事業は、戦後から現代にいたる日本のメディア芸術の諸活動を、「インターメディア」という枠組みにおいてとらえ直し、芸術史・映像史という縦軸と、同時代の様々な芸術諸活動という横軸との交差点に位置するビデオアート関連資料群に着目し、それらのデジタル化・レコード化を通じ、日本のメディア芸術史をよりよく精査可能にするための基盤構築を目指した。「インターメディア」問題とは、固有の芸術領域の閉塞状態を突破したり、そのさらなる展開を模索するために異なる芸術領域をいかに相互に関連づけ触発しあうのかについての方法論の探求と、新たなテクノロジーへの批判的な吟味だと言える。この探求の主戦場の一つとなったのはダンスや演劇や美術や音楽におけるパフォーマンス、そして展覧会である。慶應義塾大学アート・センターが所管している「中嶋興」(1941-)および「VIC」(Video Information Center, 1972-)関連資料の中からパフォーマンスと展覧会の記録に着目し、ビデオテープと写真のデジタル化・レコード化・リスト化を行うことによって、1970年以降どのように「インターメディア」問題が模索されていたのかについて明らかにすることを目指した。そのため、中嶋とVICのビデオテープのデジタル化、レコード化、サムネイル化、およびリスト整備、中嶋のビデオテープ以外の資料(主に写真資料)のリスト整備を行った。また、最新版の《MY LIFE》(中嶋興とその他数人による)を作成するためのイベント「マイ・ライフ勉強会2」等を行う。本事業は令和2, 3, 4年度メディア芸術アーカイブ推進支援事業「中嶋興/VICを基軸としたビデオアート関連資料のデジタル化・レコード化 [I, II, III]」(以下「令和2, 3, 4年度事業」)を発展的に引き継ぐものである。

公開方法

公開方法は次の通りである。リストは、報告書と慶應義塾大学アート・センターHPにて。デジタル化されたビデオテープは慶應義塾大学アート・センター・アーカイブにて。イベントの一部は報告書およびHPにて公開

本事業の背景と必要性

[ビデオ記録によって一過性の形体を有する作品\(出来事\)を掘り上げること](#) [ビデオアートからメディア芸術史を構築すること](#)

およそ1970年以降の芸術作品は、古典的な絵画や彫刻などの形体とは異なる、再現困難な一過性の形体(パフォーマンス/インスタレーション等)において実現される類の作品が多く、そのドキュメントや周辺資料によってしか作品へアプローチできないという条件がある。また、この時期は新旧のテクノロジーを連結させ、諸ジャンルの枠組みを横断させたタイプの作品が多い。それらのドキュメントとして主に流通していたのは写真による静止画だが、この時期にはビデオによる動画記録も多く残されており、時間性を孕んだ一過性の形体を有する作品の記録として、その重要性は計り知れない。こうした動画記録はビデオアートに与するものが多くある。この時期に培われたビデオアートでは、実験映画史と連続した問題を孕む作品群、複数の芸術ジャンルを連結させる「インターメディア」な機構、一過性の形体を有する作品(出来事)の記録、新たなコミュニケーション技術の構築実験、既存のメディアテクノロジーへの批判的考察等が行われていた。つまりビデオアートという枠組みにおいて、メディア芸術の重要な諸事象と諸問題が展開されているのである。

翻って戦後、〈総合文化協会〉〈世紀の会〉〈夜の会〉や〈実験工房〉等を経て、草月アートセンター、そして「クロス・トーク/インターメディア」や「70年大阪万博」にいたるまで「芸術の総合」が重要な問題の一つとされ、様々な形で展開されてきた。これらを端的には「インターメディア」問題とまとめることができる。それは固有の芸術領域の閉塞状態を突破したり、そのさらなる展開を模索するために異なる芸術領域をいかに相互に関連づけ触発しあうのかについての方法論の探求と、新たなテクノロジーへの批判的な吟味だと言い換えられる。しかし、1970年以降「インターメディア」問題は重要であり続け、様々な形で展開されながらも、1997年にICC(NTTインターコミュニケーション・センター)が設立され「インターコミュニケーション」という領域横断的なテーマが登場するまで、直接的に焦点化されることがなかったと言えるだろう。この探求の主戦場の一つとなったのはダンスや演劇や美術や音楽におけるパフォーマンス(以下諸領域にまたがりパフォーマンスと総称する)、そして展覧会である。これら1970年以降の「インターメディア」の状況を踏まえ、その歴史化を行うための資料体構築を目指した。

さらにKUACで行ってきた現在までの資料体構築の過程で、中嶋興とVICの資料体の中には多くのパフォーマンス／展覧会記録があり、両者の活動は日本に留まらず世界的にも重要だと認知され、国際的な関心を集めていることが分かっている。しかし、両者の資料体の中に含まれる写真やビデオテープの中には劣化が進んでいる資料が多くあり、早急のデジタル化を行う必要に迫られている。もし、数年以内にこれらのデジタル化を行わなければ、1970年以降のパフォーマンスおよび展覧会の重要な記録の一部が消失してしまう可能性があると言える。

また、一過性の形体を有する芸術作品の代表的な一例である「もの派」の国際的な研究動向の進展が示しているように、1960年代後半以降の日本の芸術活動に関する世界的な関心の増大に対し、日本におけるビデオアートの調査・研究によって多くの応答が可能であり、国際貢献度も高まる。本事業は、1970年以降のビデオアートの中心的な担い手である中嶋興とVICの関連資料群を通して、ビデオ記録によって一過性の形体を有する作品（出来事）を掬い上げること、ビデオアートからメディア芸術史を構築することを目的とする。具体的事業内容は中嶋興とVICのビデオテープのデジタル化・レコーディング・サムネイル化およびリスト作成、資料体とクリエーションとの接続を中嶋興の資料体を元にして考えるためのイベント（オーラル・ヒストリー／ディスカッション）等を行った。

[ビデオテープのデジタル化の緊急性と必要性](#)

ビデオアート関連資料の中で特にビデオテープは一過性の形体を有する作品（出来事）の貴重な記録であり、それ自体がメディア芸術の根本問題を表現するものであるにもかかわらず、ビデオテープというメディアの特性上、保存状態が悪く、劣化し、再生困難な状況にあるものが多い。国立映画アーカイブにてユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベントとして「マグネティック・テープ・アラート：膨大な磁気テープの映画遺産を失う前にできること」（2021年10月16日）が行われ、2025年までにデジタル化されなければ、磁気データが失われかねないという、継承を行う上での一つの基準が提示された。中嶋興とVICのビデオテープ資料も例外ではなく、カビの発生、バインダー化、再生機器の不足など、ビデオテープの内容を詳らかにする以前で立ち止まらざるを得ない状況下にある。ビデオテープに適切な処置を施すとともに、デジタル・データ化を行い、レコーディングすることが喫緊の課題である。

主概念および対象資料

インターメディア

「インターメディア」とはディック・ヒギンズ（Dick Higgins, 1938-1998。それ自体が「インターメディア」的な芸術運動であったフルクサスの創設メンバーの一人）がサミュエル・テラー・コーリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）から採用し1966年のテキスト*において提示した概念である。これは「前衛」という概念がもつ未踏の新しさという価値を留保し、諸作品のコンディションを分析するための概念として提示された。そしてまた、絵画や彫刻といった単一のメディアに規定されず、諸メディアの間にあるというマルセル・デュシャン（Marcel Duchamp, 1887-1968）以後から顕著に現れてくる作品群のコンディション（例えばデュシャンのレディ・メイドは彫刻と生活というメディアの間に位置している）および新旧のテクノロジーを柔軟に用いるというコンディションを指し示す。また、各自が異なったメディアを扱う複数のアーティストおよびエンジニアに代表されるような非芸術を専門メディアとしているような人物達によるコラボレーション作品の増加という芸術活動のコンディション（ある人もまたひとつのメディアである）をも示している。そして、戦前から一つの理念として提示されていた、芸術の「総合」問題とも接続される概念である。この概念を通じて、所与のメディアそれ自体における探求だけでなく、所与のメディアの連結またはそれらと新たなメディアとの連結、およびそこから創発された新たなメディアの様態も分析可能になる。また、芸術作品それ自体だけでなく、作品の生成プロセスに関わる人物・その行為・資料等も作品を構成していく複数のメディアであり、それら連続し協働する諸メディアの様態すなわちインターメディアとしてある作品に関わる芸術活動全体を分析することが可能になる。そして、この「インターメディア」な芸術諸活動のアーカイブ化は、多様なメディアが混淆しているアーカイブそれ自体の探求をも促すだろう。

*Dick Higgins, "Intermedia," *The Something Else Newsletter*, vol. 1, no. 1, (New York: The Something Else Press, February 1966).

中嶋興

中嶋興は1941年熊本生まれ。1960年代後半よりアニメーション、写真、ビデオアート、彫刻、インスタレーション、芸術運動（「ビデオアース」）、記録（「もの派」や松澤宥「ψの部屋」



といったドキュメント写真)などの多様な活動を行っている。特に《生物学的サイクル》(1971-)と《My Life》(1976-)等は、数度発表されているが、同時に未完であり、現在にいたるまで再編され続けられており、中嶋の制作に対する特異な姿勢を表現する映像作品である。「一生一作」というモチーフを掲げ、個別の映像作品を数珠の玉の一粒と考え、現在までのおよそ30本の作品を数珠として繋げる企画を進行中である。また、2019年には新たな撮影映像を加えた《MY LIFE》の制作・上映を行った。中嶋が

記録したビデオテープの総数はおよそ4,000本以上あり、その全貌を把握できていなかったため、全ビデオテープおよび記録写真のレコード化とリスト作成が望まれていた。中嶋のビデオテープ・コレクションの中には手塚治虫(1928-1989)が1980年に訪中した際の記録映像、その他、マイケル・ゴールドバーグ(Michael Goldberg, 1945-)との共作の映像など、デジタル化すべきビデオテープが多くあるが、ごくわずかしか内容閲覧できる状態になっておらず、早急なデジタル化が待ち望まれている資料群である。2018年にはMoMAのアーカイブチームが中嶋の膨大な記録テープの一部でも把握しようと調査を試み、2019年にはMoMAが初期の映像作品を収蔵するなど、その活動は国際的に注目され、重要な人物として位置付けられている。慶應義塾大学アート・センターでは中嶋興本人より2018年に寄託を受けた資料をもとに現在、作業を進めている。写真：約40,000枚(フィルム・スリーブの場合は一コマを一枚とカウント)、クリッピングや印刷物その他紙媒体資料：約1200件、映像：約4,000件、総計：約45,200件を所管。松澤宥の「ψの部屋」および「もの派」作品の記録写真がデジタル化され、閲覧可能である。また「アート・アーカイヴ資料展XIX：中嶋興—MY LIFE」(2019)に合わせて、中嶋が所蔵していたビデオテープ(Hi8, VHS, miniDV)約4,000本を預かり、デジタル化を進めている。また中嶋の年表作成のため、約900件にいたる印刷物を中心とする紙媒体資料を預かり、レコード化を進めている。

本事業では、応急処置を必要とするビデオテープのデジタル化(355本)、デジタル化したデータのサムネイル化(1356件、事業開始前の未サムネイル化分を含む)および、分類困難かつ内容が未詳である写真資料の内容調査を行った。そして、中嶋の代表作の一つである《MY LIFE》の最新版制作を中嶋興とその他数人によって行うことを目的としたイベント「マイ・ライフ勉強会2」(2024年1月31日開催)——「マイ・ライフ勉強会」(2023年1月21日)の2回目——を行う。KUACでは大学院生に向けた「アート・アーカイヴ特殊講義」を開設しており、そこではアート・アーカイヴが単なる貯蔵庫や諸物の集積であることに留まらず、芸術を思考するための一つの方法論であることを探求している。その講義において《MY LIFE》をモデルにアーカイヴについて考えた。なぜなら、中嶋は自分の人生を記録し、アーカイヴ化を行うアーキビストであり、《MY LIFE》とはその実践的モデルだからだ。受講生はこの講義を元にそれぞれの「MY LIFE」ビデオを作成し、それらを上映、中嶋による講評とディスカッションを行う。

また、CCJ(Collaborative Cataloging Japan)の企画中嶋興特集(2023年12月-2024年1月)へ映像と知見を提供した。「令和2,3,4年度事業」及び本事業を通じて現在1,414本のテープがデジタル化され、閲覧可能となっている。しかしおよそ2,600本のビデオテープはアナログ・データのままであり、容易に閲覧できない状態にあるため、今後も継続的なデジタル化作業が必要である。



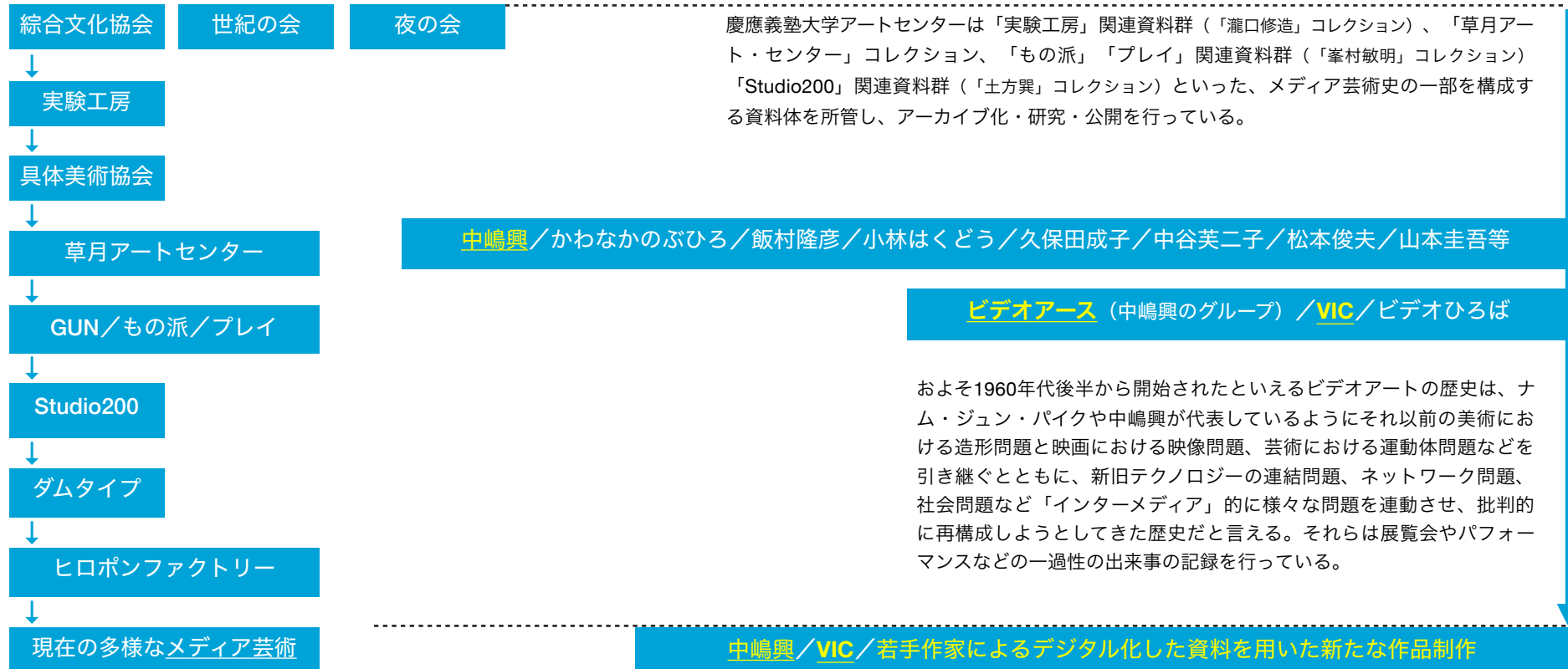
VIC (Video Information Center) は、1972年、国際基督教大学 (ICU) の演劇サークルであるICU小劇場を母胎として開始した。設立時のメンバーは6名で、伊藤裕介・菅靖彦・野山尚志・内木誠・石井宗一、そして手塚一郎が代表をつとめた。手塚一郎が作成したガリ版刷りの設立主旨書には、VIC設立動機と活動の目的が以下のように簡潔に語られている。ICUにおいて、学生同士の交流が少ないという問題があること。そして、その問題を解決するために、ビデオを用い

て「(映像・音響を含めて)より全体的に、かつ正確迅速な情報交換—究極にはコミュニケーション—を実現する」(「VIDEO-INFORMATION CENTE[R] 設立主旨書」、1972年)ことである。こうして成立したVICは、以後大学サークルの範囲を超えて、様々な活動を展開することになるが、その活動は、「ハイ&ローを問わない網羅的なイベントの記録」「ビデオ・テクノロジを用いたコミュニケーションの実験」「ビデオ関連イベントの企画」「国内外の芸術グループとのコミュニケーション」「ビデオの普及活動」の大きく5つに分類することができる。VICは、中谷芙二子・山口勝弘をメンバーとする「ビデオひろば」など、同時代のビデオを巡る動向と連動しながら活動を行っていた。海外のグループとの交流もあり、1979年にはニューヨーク近代美術館 (MoMA) で開催された展覧会「Video From Tokyo To Fukui and Kyoto (ヴィデオ東京から福井と京都まで)」にも出品した。このとき上映されたのは、田中泯〈舞態7〉、土方巽・芦川羊子〈ひとがた〉の2つのパフォーマンス作品の記録で、MoMAのプレスリリースには「VICのドキュメンタリー作品の代表的な例」と紹介されている。慶應義塾大学アート・センターでは、VICのリーダーである手塚一郎より2018年に寄託を受けた資料をもとに現在、作業を進めている。ビデオテープ：1,176本、企画書などの書類：45件、クリッピング：96件、写真：47件、印刷物：72件、総計：1,436件を所管。本事業は慶應義塾大学アート・センターが行った平成29年度 我が国の現代美術の海外発信事業「VIC資料を基軸とする1970年代の日本美術関連資料の整備と国際発信」および「令和2,3,4年度事業」を部分的に継承している。

本事業においては、ビデオテープのリスト整備、および応急処置を必要とする一部のビデオテープのデジタル化 (80本)、デジタル化したデータのサムネイル化 (243件) を行った。またVICが記録した「北方舞踏派」関連ビデオテープ (VIC0083-0090) は、北方舞踏派の結成記念公演『塩首』やりハーサルの映像のみならず、ビショップ山田をはじめ、土方巽、磨赤兒ら舞踏にとって重要な人物が集結した公演後の打ち上げまで捉えた重要な記録映像である。これをテーマに舞踏について考えるための企画「ポートフォリオBUTOH『塩首』〈全編〉上映会」(2023年12月2日)に協力するとともに、「前衛演劇の探求Vol.1「大野一雄舞踏公演『ラ・アルヘンチーナ頌』研究上映会」(2024年3月8日)へ映像提供という形で協力する。また、CCJのVIC特集 (2024年3-5月)へキュレーションと映像提供を行った。また、土方巽のスタジオ兼ホールである「アスベスト館」において製作および土方の死後に資料体の整理及び舞踏の普及に貢献してきた森下隆に助言をもらうとともにVICテープに関する聞き書きなどを行った。

「令和2,3,4年度事業」、および本事業を通じて現在908本のテープがデジタル化され、閲覧可能となっている。しかしおよそ268本のビデオテープはアナログ・データのままであり、容易に閲覧できない状態にあるため、今後も継続的なデジタル化作業が必要である。

「インターメディア」性を特徴の1つとする戦後の前衛運動の系列



以上は戦後の芸術運動グループの代表的なものの一部である。このような時系列において各グループが問題を直接的に継承したり、発展させていたりする訳ではないが、全ての運動に共通して言えるのは「インターメディア」性を有するという点である。

今年度のプログラムとして教育とビデオ・アーカイブを接続する試みを行った。KUAC設置講座の「アート・アーカイヴ特殊講義」において中嶋興の《MY LIFE》を視聴・分析し・議論した後、各学生が各自の「MY LIFE」を制作し中嶋興に講評してもらった後、ビデオとアーカイブについての議論を行う。

本事業の実施体制／手法／主な作業内容

慶應義塾大学アート・センター（KUAC）所管資料体

中嶋興コレクション

アドバイザー：中嶋興

成果

ビデオテープのデジタル化・サムネイル化、リスト整備

355本のビデオテープのデジタル化、1356件のサムネイル作成



イベント

- マイ・ライブ勉強会2 (2024年1月31日)



主たる作業

資料整理
ビデオテープのデジタル化・レコード化・サムネイル化
リスト整備
ビデオ・アーカイブの可能性を探るための議論、および活用

主たる調査・研究個人協力者

足立アン (Collaborative Cataloging Japan [CCJ])
Nina Horisaki-Christens (メディア芸術研究者)
瀧健太郎 (ビデオアーティスト)
中川陽介 (メディアアーティスト)
好光義也 (パフォーマンスメディアアーティスト)
飯田豊 (メディア論立命館大学准教授)
山腰亮介 (アーキビスト)
森下隆 (キュレーター)

主たる調査・研究・デジタル化・編集・保存協力機関

CCJ
埼玉県立近代美術館
株式会社カロワークス/株式会社東京光音

両資料体の国際的な発信に関しては、CCJと協力。

コラボレーション

CCJの特別プログラムである中嶋興特集 (2023年12月-2024年1月) に協力するとともに、特別プログラムVIC特集特別プログラムVIC特集 (2024年3月-2024年5月) 2024年3月-

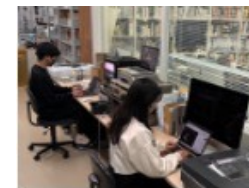


VICコレクション

アドバイザー：手塚一郎 (VICリーダー)

ビデオテープのデジタル化・サムネイル化、リスト整備

80本のビデオテープのデジタル化、243件のサムネイル作成。



Hi8、VHS、MiniDVなどの状態の良い一部のビデオテープはKUAC内においても、デジタル化を行った。

イベント (協力)

- 「ポートフォリオBUTOH『塩首』〈全編〉上映会」 (2023年12月2日)
- 「前衛演劇の探求Vol.1「大野一雄舞踏公演『ラ・アルヘンチーナ頌』研究上映会」」 (2024年3月8日)



事業の文化的・社会的・経済的効果

本事業は縦軸である芸術史・映像史と、横軸であるその他の芸術諸活動との交差点に位置するビデオアート関連資料群（中嶋興・VIC）を通し、メディア芸術史を調査・研究するための基盤構築を目指している。期待される「文化的効果」としては、ビデオアートの諸資料群が包含する多様な芸術活動・及び社会的諸事象の記録が開示されるとともに、現代日本のメディア芸術を歴史的に定位することで、戦後から現代という範囲だけではなく、前近代をも通底する日本の芸術史編纂の仮説的／仮設的足場を構築することが挙げられる。これは、国内外の研究者の既存の関心へ応えるだけでなく、学際的・国際的な新たな研究的関心の発生を促す作業であるとともに、批評的な基盤を準備し、さらには新たな芸術作品を醸成するマトリックスとなり得る。

ビデオアート

ビデオアートは縦軸として芸術史・映像史を、横軸として同時代の多様な芸術活動との連関を包含しており、メディア芸術史を構成する核となる。

縦軸：芸術史・映像史

芸術史（美術・音楽・ダンス・演劇・運動など）		映像史（写真、映画、ビデオ）					交差点としてのビデオアート
横軸：同時代の多様なイベントの包括的な記録							インターメディア芸術
展覧会	パフォーマンス	インスタレーション	作品の制作過程	シンポジウム	社会問題	テクノロジー	メディア芸術史の構築
諸効果	日本の芸術史編纂および批評のための基盤構築		新たな芸術作品を醸成するマトリックス		社会問題やテクノロジーへの視座		

期待される「社会的・経済的効果」としては、すでに世界的な文化的財産として強く認識されている前近代以降の日本の芸術活動の系譜に、現代日本のメディア芸術活動を接続させることによって、メディア芸術に対するより一層の関心の増大と研究の促進や、現在のメディア芸術関連作品に対する市場価値の向上が期待される。また、「インターメディア」技術がますます重要になる現代において、ネットワークシステム及びメディア技術に対する批判的かつ創造的な分析を行うための基盤を用意する。